

恩師の意志を受け継ぎ

「地域の人びとのために、今日も走る」

文/フレンチオ編集 写真/坂井亮



タオルと自転車

最初にタオルをかけたなんとも親しみやすい出で立ちで迎えてくれたのは、名古屋市内でも昔ながらの情緒を残す八事に診療所を構える杉浦医院の院長、森さん。患者と医師の間の垣根を取り払い、同じ目線の町医者でいたいという思いから白衣を着ないのだという。今ではタオルがトレードマークとなっている。

「病気を診るのではなく、病気を患った人を診ることを心がけています」という森さんは、12時半、午前の診療を終えるや、慌ただしく出かける準備を始めた。足となるのは電動自転車。彼は診療所で座っているだけではなく、訪問診療にも力を入れているのだ。森さんを待っている患者の多くは「残り少ない時間を家で過ごしたい」というお年寄りたちだという。

病気の診療はもちろんだが、「生活を診る」という観点から、NSTチーム杉浦医院として患者の食事面をサポートする活動も併せて続けている。歯科医師や栄養管理士、呼吸器リハビリのできる理学療法士などの専門家が、口から食べられるようチームで患者に対応している。「食べる」とこそ「生きる」といふことだとの考えからだ。

森さんは地域に根差す開業医として、人びとの健康をゆりかごから支えなければならぬと考えている。そして、ときには人間らしく最期を迎える手伝いをすることも自分の大切なつとめとしている。

先代から学んだこと

森さんが医師を目指すきっかけとなったのは小学校3年生の時、母を胃がんで亡くすというつらい経験からだった。母のように苦しんでいる人を救いたいと思った。そしてさらにその思いを強くしたのは医大を目指した浪人時代。ホームレス支援活動に参加した時であった。まだ医師の卵でもなかった自分を頼り、感謝されたことがうれしく、自分にできることはなんでもやりたいと思った。その活動がきっかけで生涯の恩師である杉浦医院前院長、杉浦裕さんと知り合う事となった。

地域医療に貢献し、ホームレスや外国人など助けを必要とする人に惜しみない支援をしてきた杉浦先生が病に倒れ、医院の後継者として声をかけられたのだ。杉浦先生は末期の胃がんだった。幼少期に見た母の姿と重なった森さんは、杉浦先生、地域に人びとに貢献できるならばとの思いで引き受けることとなった。

余命半年といわれるなか、杉浦先生の行ってきた医院の経営、そして、さまざまな支援活動の継承がはじまった。強い意志があつてこそであるろう、杉浦先生は2年間生き、森さんにその信念を伝え続けたのであった。自身がつらいはずなのに、自分を頼る人びとのことを絶えず心配し、最後まで医師であろうとしていた杉浦先生。先生に就いて学べたことは大きな財産となったという。

恩師の志を引き継ぎ、森さんは今日も町を駆け回っている。

Doctors White Paper

医師は「医師」であると同時にひとりの「人」である。多忙な日々の中で責任を全うし、かつ自分の人生を輝かせる秘訣は、その人のバイタリティにあり、とみた。



右ページ:坂の多い街での必需品、電動アシスト自転車。訪問診療時に自転車で回ることによって商店街や道端で患者さんの日常を確認し本当の意味での患者さんを知ることができるという。
左:診療中の森さん。並行してNSTチームが患者と家族に食事でのアドバイスをサポートしている。
下:1955年から同じ場所で地域の健康を支え続けている杉浦医院。先代杉浦先生の思いを継承し、患者にとっての最適な治療を提供している。



PROFILE

森 亮太 Ryota Mori

1970年生まれ。名古屋市立大学医学部卒業。淀川キリスト教病院で内科・小児科から救急、ホスピスでの緩和医療まで幅広く研修。名古屋市立東市民病院で外科医として勤務。国立療養所恵那病院(現市立恵那病院)では、NST(栄養サポートチーム)を立ち上げ。名古屋共立病院、第1なるみ病院を経て2010年4月から杉浦医院の副院長として勤務し、2011年1月より院長に就任。医療法人八事の森 理事長。NPO法人さしまサポートセンター 理事長。外国人医療センター 理事。名古屋労災職業病研究会 代表。